倉敷都市圏 2012年(平成24年)6月19日 火曜日

山陽新聞
6月19日
火曜日

水島が環境学習の場に

公害患者と対話や工場見学

県内外から大学生ら来訪

かつて公害被害で苦しんだ倉敷市水島地区が、大学生らの環境学習の場となっている。患者への聞き取りなどを通じて公害の歴史を学ぶとともに、コンビナート企業の最先端の環境対策を見学。水島地域環境再生財団（みずしま財団、同市水島西栄町）が研修ツアーを企画するなど、受け入れ態勢の整備も進んでいる。6月は環境月間―。

（大橋洋平）

みずしま財団職員（左奥）から環境について学ぶ川崎医科大の学生たち＝6日、倉敷市呼松町

6日、水島コンビナートを見下ろす鷲羽山の展望台（同市呼松町）。「煙突を高くしたことで汚染物質が山を越え、被害を広域化した」。みずしま財団職員の説明に川崎医科大（同市松島）の学生約30人が聞き入った。

一行は公衆衛生学の社会実習として来訪。展望台で公害の歴史や地理的な要因を学んだ後、会場を移して公害患者や診察した医師から話を聞いた。4年神坂恭さん(22)＝同所＝は「身近な地域だけに環境汚染の怖さを実感できる」と話した。

ツアーモデル開発

水島地区は1960年代前半、重化学工業の国内大手が相次いで進出し、コンビナートを形成。県の経済成長に大きく貢献した。一方で、肺気腫、気管支ぜんそくといった呼吸器障害を訴える住民も現れた。

みずしま財団は公害訴訟の和解金の一部で設立され、公害の語り部活動、海底ごみや河川水質の調査などに取り組む。コンビナート企業も汚染物質の排出抑制、汚水の浄化などの環境技術を持っており、大学などにとっては「環境学習の適地」（川崎医科大）となっている。

窓口役を務める同財団によると、大学などの来訪は2009年ごろから目立つようになり、教育機関向けの研修ツアーモデルを昨年2月に開発。貸し切りバスで市内を巡り、公害問題の講義や患者へのインタビュー、工場見学などをパッケージ化した。

同8月には専修大の学生12人が3泊4日で来訪。かつての大気汚染の実態、治療の難しい子どもを受け入れた院内学級「あおぞら学園」について調査し、200ページを超える報告書にまとめた。

今月23日にはソワニエ看護専門学校（岡山市中区倉田）、9月には島根大が訪問を予定している。

高まる拠点性

水島地区では今年4月、旧水島サロンを改修した市環境交流スクエア（倉敷市水島東千鳥町）が全面オープン。環境学習センター、環境監視センターが入居するほか、環境関連の資料が豊富な図書館、会議室、大気測定や水質分析を行う研究機関がそろっており、環境学習の拠点性を高めている。

同財団の塩飽敏史研究員(36)は「市環境交流スクエアとも連携し、水島を学生たちが環境の大切さを学ぶ場として定着させたい」と話している。